

「青戸棒踊りの伝承活動」

1 学校名

南九州市立青戸小学校

2 学年・人数

4～6年生（計43名）

3 日時・場所

(1) 練習の日時・場所

平成28年7月～9月 総合的な学習の時間（本校体育館・運動場）

(2) 発表の日時・場所

平成28年9月25日（日） 秋季大運動会（本校運動場）

4 伝承・活動に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事について

(1) 名称

青戸棒踊り（あおとぼうおどり）

(2) 由来

青戸棒踊りは約200年前、青戸上の宝代五郎兵衛という人が、鹿児島市喜入町から習って伝えたのが始まりだと言われている。

台風や干ばつなどに悩まされ続けた農民の唯一の娯楽芸能で、豊作祈願・豊年祝いのほか各種の祝賀行事で踊られてきた。戦後久しく途絶えていたが、昭和44年現在の穎娃町役場庁舎の新築落成祝賀会に出演したのがきっかけで本格的に復活し、保存会を結成した。

棒踊りは、県内の至る所で踊り継がれているが、歌の文句や調子・服装・道具・振り付けなど大きな違いはないようだ。青戸小学校の子どもたちが踊るようになったのは、昭和60年、学校の要請もあり、上学年児童に指導し、秋季大運動会で披露したことが始まりである。

(3) 構成等

デバイという入場に始まって鎌（かま）踊り・中六尺（ちゅうろくしゃく）踊り・長刀（なぎなた）踊りの三つの踊りをそれぞれ2回ずつ踊る。長刀踊りは、牛若丸と弁慶の京の五条の橋の上の戦いを表現した踊りである。

鎌踊り・・・鎌2人，六尺棒4人の6人一組

中六尺踊り・・・六尺棒2人，木刀4人の6人一組

長刀踊り・・・刀1人，長刀1人の2人一組

青戸棒踊りの特徴は、棒踊りの前に「トンカラカッ」という滑稽な踊りが踊られることだ。棒踊りは舞台の踊りではなく観衆の中での「平場の踊り」で、棒を振り回して危険なため、トンカラカッの一隊が観衆を追い払って安全な踊り場を確保した後、踊るのがねらいで先人の知恵で

考案されたものようである。

トンカラカッとは、太鼓・鉦・撥などを打ち鳴らす音からつけた名前だと思われる。オカメやヒョットコ面などで顔を隠しハッピー姿に赤ふんどし素足の出で立ちでバチを打ち鳴らしながら鉦や太鼓に先導され、左右にわかれて滑稽所作で観衆を追い払う踊りである。

5 保存会や地域との連携の具合

青戸棒踊りは、毎年、4～6年生の児童全員が秋季大運動会で披露することを目的としているため、初めて踊る4年生は7月から練習をはじめ。練習の初日は、保存会の方から、青戸棒踊りの歴史と由来について話を聞く。4年生はこれまで踊ってきた青戸の先人たちの思いを感じながら練習を行っていく。

練習の日程や秋季大運動会までのスケジュール等について打ち合わせ、練習日程が決まると保存会が地域の方や踊った経験のある保護者に呼びかけ練習を開始する。練習には毎回常に7、8人の保存会の方々や地域、保護者の協力がある。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

文化財伝承に当たり工夫した点は、次の3点である。

まず一つめは、4年生の総合的な学習の時間に青戸棒踊りの学習を取り入れたことである。青戸棒踊りをただ踊るだけでなく、青戸校区の方々が昔から踊り継いできた歴史や由来について自分たちで調べ、どのような経緯を経て踊るようになったのか、どんな思いで踊り継いできたのかを考えさせるようにしている。その結果、郷土を理解することにつながり、郷土を愛し、郷土に誇りをもたせ、この地で生きている自分自身に自信を持つことができると考えている。

二つめは、地域の人材を活用することである。先にも述べたように初めて棒踊りを踊る4年生には第1回目の練習の前に青戸棒踊りについて話をしていただく。これは、調べ活動をするとは分かることであるが、あえて保存会の方に子どもたちの前に立って話してもらおう。また、練習も保存会や地域、保護者の方々に全面的に教えてもらっている。これは、棒踊りに対する思いや情熱を子どもたちに感じさせながら踊らせるためである。熱心に教えられると子どもたちもそれに応えようと真剣に学習しようとするのをねらっている。

三つめは、上の学年が下の学年に教える形をとっていることである。4年生から踊り始めるため、当然4年生に教えることはたくさんある。しかし、保存会の方々は毎日教えられない。そんな時は、5・6年生が4年生に教えるようにしている。学年の上の者が下の学年の者に教えることがまさしく伝承であり、子どもたちの人間関係も良好なものになると考える。そのことによって、子ども同士であっても青戸棒踊りを大切に伝承していこうとする心情の高まりが期待できる。

7 取組の様子（練習状況，発表の場等）



棒踊りの歴史・由来を伝授



棒踊り練習風景



秋季大運動会で披露



秋季大運動会で披露

8 参加児童生徒・保護者・保存会・教員等の感想

【児童】

- ・ 初めて踊ってみて，隣の人とタイミングを合わせるのが難しかった。本番では，たすきを付けるとみんなとてもかっこよかった。緊張の中で踊ったけれど，うまく踊ることができてよかった。この青戸の棒踊りがずっと続いてほしい。

【教員】

- ・ 本校に在職した代々の教員が引き継いできた伝統を引き継げたことに喜びを感じる。伝統は，誰か一人が引き継ぐものではなく，関わる人がみんな引き継がなければいけない。その一端を担えることができ，責任を果たすことができてよかった。

【地域の方々から】

- ・ 青戸の伝統を子どもたちが引き継いでくれたことがうれしい。子どもたちが一生懸命学ぼうとするほど我々も教え甲斐がある。青戸の子どもたちが棒踊りを踊ることで，青戸に一体感が生まれ，自分たちが住むこの地に誇りをもつきっかけになってほしい。